

新刊案内

本川 次郎

五年ほど前のクリスマス・イブでした。浦上天主堂のミサにあずかっていた時に脳梗塞を発症、二ヶ月余の入院加療の後、退院したものの、左半身不随となり、リハビリに励みましたが、その効果は遅々たるものでした。

これまでわが家の経済を支えてくれた焼き物の仕事に戻るという事は不可能となりました。

こうなってみて、自分がこれまで辿ってきた自分史の軌跡が、果たして残されているものか不安を覚え、せめて、病後の足どりだけでも残しておこうということでも文筆活動を始めました。

印刷したものならば全国に散らばっている知人、友人などに私の消息を伝える事ができ、旧交を暖めることも出来はしまいかという期待あつたのでした。

まずは、私たち家族の口を養ってくれた陶芸にかかわる技術や茶道文化史について「焼き物こぼれ話」を書き、茶の歴史やその美意識、焼き物の鑑賞の仕方といったことを書き、

更に理解をたすけるために半分近い紙数をつかって古陶、新陶の写真のせた。幸いに此の本は好評で各方面から増刷が望まれ嬉しかった。

次にこれまで一銭もかせいでくれないことになかった私の本職がある。其の本業と言うのは宗教哲学であり、なかでもキリスト教神学である。この分野でもなにか小著でも残しておきたい、また十二年前に亡くなった妻との語らいを絶やさないうためにと言う思いから、彼女に献呈する為に



「実がはじけて」 本川 次郎作

してくれた寺方の存在を抜きには語れないという思いがあつたのです。

「涸れた井戸：」は寺請けとなつたコロビのキリシタンと曹洞宗の僧とのあいだのアツレキと和解をテーマにしております。小説の荒筋は、と言えば、子どもの葬儀をとり行うために請われて長崎港外の高島へ渡海したもの、受け入れる側のキリシタン部落の頑迷な抵抗に困惑する僧侶の姿、しかしこの島の水不足、生活苦といった窮状を知られば知るほどに無関心でおれなくなつて、良かれと思つて施した彼の慈悲が余期せぬドンデン返し、悲劇的な結末をむかえることになるという筋立てです。愛が出会う運命ともいえましよう。

次いで「件のその若者―異説天草四郎」は、資料が殆ど残っていない天草四郎の苦渋にみちた実像に迫ろうというものです。口の津うまれといわれる山田右衛門を中心に話は展開します。

当時、長崎に居宅を構えていたという叔父をたよつて長崎に遊学した四郎。西洋事情を学びマカオの商人たちとの交流もあつて、詳しい植民地情報も耳にしていたはずの彼が何の勝算あつて農民達を率い、幕府に反抗して原城に籠つたのであろう？ 十四、五才の実戦の経験もあるまいに、槍、鉄砲を使い慣れていなかった農民を率いてそのような暴挙を企むとは？

どうしても不可解です。私は其の背後に見え隠れする仕掛人の存在を疑つてみました。事実、甲賀者の暗躍のあつたことは事実のようです。鍋島の進駐におそれなした農民たちは廃城となつていた原城に籠り、奪つてきた関船を解体しその船材で城を補修したように伝えられています。

それにしても、どうして幕府は十二万もの大軍を送り一揆軍の息の根を止めようとしたのか。半島の突端近くに追いつめられた農民たちは放置しておいても短時日のあいだに当然、解体する運命にあつたものを。

何ヶ月もの籠城がつづき、糧食がつきさしあつて戦うべき敵の姿をみないとすれば、自壊したことも考えられるからです。

私は天草四郎が好きなファンの心理も判らぬでもないのですが、アコーディオンの蛇腹のような広いエリをつけ異国のいでたちの美少年の姿にはなじみません。

もし伝えられる通りの若武者、一軍の将ならその面持はさぞ苦渋にみちたものでなかつたのか、その苦しみと悲しみに同情できるだけにこの小説を書きおろしたといえます。彼の实像にいささかでも迫ることが出

キリスト教のABCを書いた。

誰の目にもシキイの高いキリスト教への入場口となるのか、それとも退場口となるのか、現代人にとつては、やはり異言としてしか聞こえないのでは？という不安をかかえながら出版した「七年目のラブレター」という本である。

本稿では、これから私がこの二年間に自費出版した二冊の小説の紹介をさせていたきたい。それには大学時代の環境が原因している。幸い、作家や評論家たちとの人脈が私には少しあつたことである。評論家の佐古純一郎、作家の椎名麟三、それに「猫は知っていた」という推理小説で知られる仁木悦子こと、大井三重子さんが文壇にでられる前に私がすこし語学の手ほどきや、何やらさせて頂いたことがあるといった環境もあつて、文学に刺激されたということによるものでしょう。

昨年十一月には「涸れた井戸を覗いた男」という小説を好文堂本店に出して頂きました。ある期間ベストセラーズだったそうこれは驚きでした。大村純忠の時代、領内の寺院や神社はキリシタンたちの打ちこわしにあつて大変な受難の時がありました。その後、風向きが變つて立場が逆転したのですが、明治も五年もたつてキリシタン禁教の制札はおろされ、ようやく信教の自由が保証されることになりました。この時を待っていたかのように本土や五島の島々で息をひそめていたキリシタンの人達が日の当る場所に出るや教会堂の建築をはじめたのです。僅か五十戸にもみたぬような小島の部落でも教会堂をもとめ、なげなしの金品をささげ労力を惜しみませんでした。こうして長崎の教会群が生まれました。

私が注目したのは、キリシタンの忍耐と信仰の強さは言うまでもないとして、キリシタン衆の存在と動きを知りながら、それを告発もせず、見通してくれ、時には助けてくれた地下の仏教徒たち、寺方の存在です。積極的に、というのではなかつたにしても、消極的にキリシタンを庇護

来れば、という思いだけで…。

なお、写真は自作の壺「実がはじけて」で「焼き物こぼれ話」にのせたものです。(陶芸家)

風信

○十二月も二十日を過ぎると、何んだか新年を迎えるソワソワした気になるので、昔の長崎の年末はどうであつたらうかと気にかゝり、書棚より寛政九年(一七九七)長崎の人野口文竜が記した「長崎歳時記」を取り出してみた。

一、十二月廿二・廿三日比より廿七・八日比まで家々年の餅を搗く。新たに恵方棚をしつらえて春を、むかふる用意をなす。餅つきの日新嫁のある家は出入り者ども集り新嫁を抱えて白に入れんとす。この時家の人々「千貫・萬貫」など声をかけ、御祝儀を出し買いとり。家人共々大いに笑い新嫁を祝う。之を「白入り」といふ。また大黒柱餅という事あり。

一、十二月廿四日 家々酒を入る事を忌む。是は愛宕山の縁日にて此の日酒をつつしむ時は、此年中、火災をまぬがる由いひ伝う。これを「酒精進」の日と言ふ。

一、十二月廿八日九日のあいだ松を立て並べかゝみ餅を供う。この日両親に鏡餅に塩鱒など取りそろえ送るを嘉例とす。

この日、蓬菜と言ふ「手かけの台」、幸木を用意す。
一、晦日 迎春の用意をす。掃除。夕方より神前・佛前・浴室・雪隠に至るまで燈火をかゝげ、家内昼のごとくにす。家では翌朝の雑煮・重肴・屠蘇等の用意す。此夜みそか蕎麦を食す。

○長崎名勝図絵巻之四・祇樹林の項にも「年の瀬」の事をよんだ句碑の事が記してあつた。

祇樹林は崇福寺末寺なり。寺は西山村にあり：側に芭蕉翁の歳旦塚を立つ境内二百坪。祇樹林は現在なくなつてはいるが、旧寺の境内岩壁には芭蕉の句は今も残つてはいる。その句は「長崎の歳旦貫う歳暮哉」とある。然し丹羽漢吉先輩の「詳訳長崎名勝図絵」を読むと、「この句は芭蕉の作ではないと言はれてはいる」と記してあつた。

良き、お年を お迎え下さいませ。

